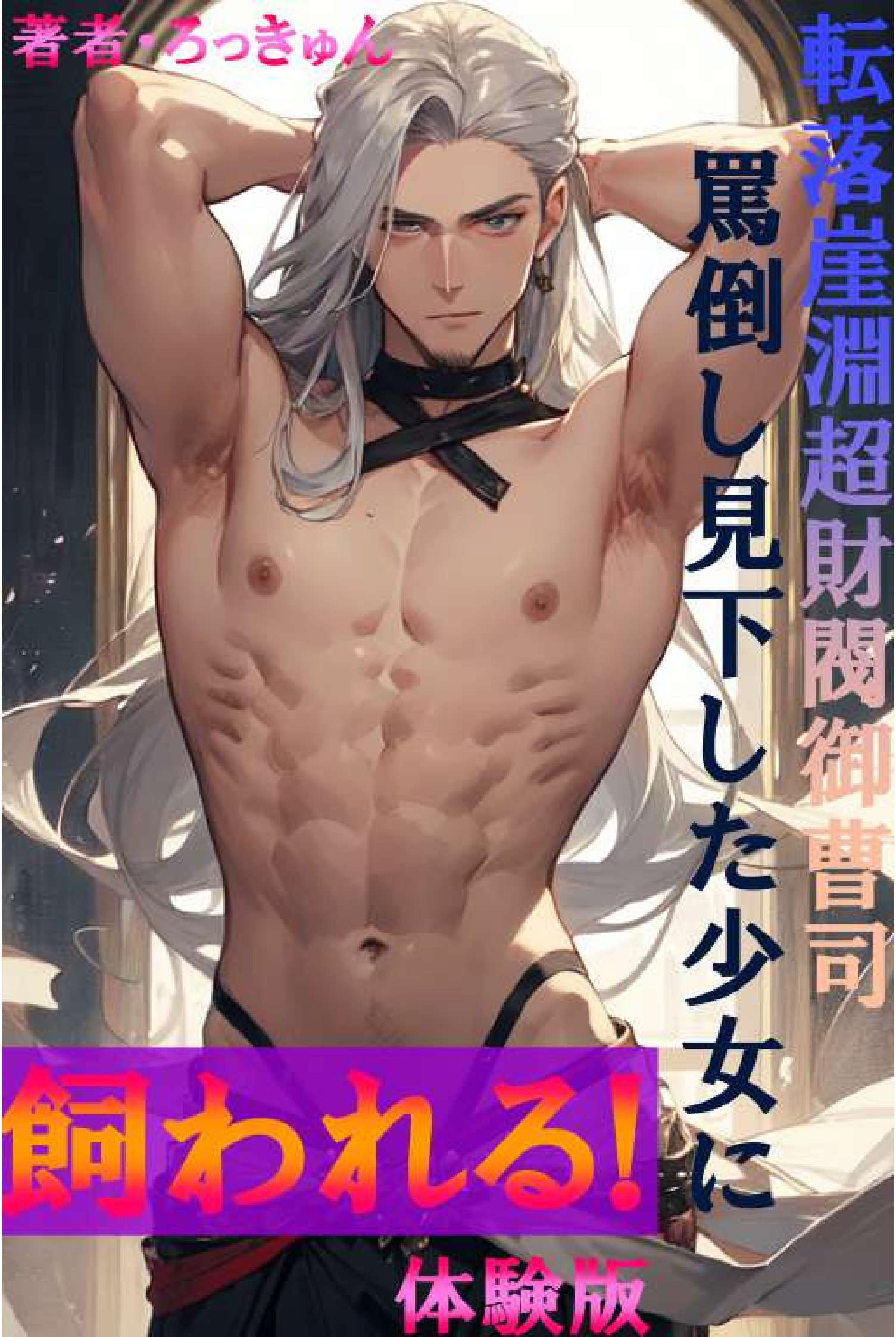
著者：ろっきゅん
転落崖淵超財閥御曹司
罵倒し見下した少女に
飼われる！
体験版

体験版：転落崖淵超財閥御曹司、罵倒し見下した少女に飼われる

ろっきゅん

序章

「ええい、貴様のような凡百企業に投資して、一体俺に何の特があるってんだ！」

高度急成長を遂げた絶佳な夜景が有名なマレーシア首都クアランプール。立ち並ぶビル群は経済成長を誇示させ、巨大なビルのガラス窓へ穹窿の紺碧と陽光を反射させる。

そんな眺望を一際巨大なビル最上階から見下ろせる男がいる。

「セシリア、客人は御帰りだ。丁重にロビーまで放り出せ！」

その男の名は海道稀阿（かいどうキア）。

微風で輝き揺れるは稲穂のような金の髪。肩で切られた髪を鬱陶しそうに跳ねあげる挙措は、逐一様になっている。顔の彫りもアジア系とはかけ離れ、むしろ欧州の人間のように掘り深い。少し青みがかった瞳が示す通り父親はスウェーデン女性とのハーフ、母親にしては生粋のオーストリア。つまり海外ではごくごくありふれたクォーターだ。

それでも国籍は日本人となっている。

そして、白のスーツにシックな青ネクタイで決めていれば、彼と対面する輩も普通ではない。分刻みで来訪するのは各国の重鎮、企業家、政治家、官僚。そして今度は。

「ああ、フランスでは有名な企業家か」

そのフランス語に、稀阿の体面に座った二人が破顔するが。

「ああ、解ってる、解ってるよ！　融資を取り付けたら必ず数年で収益をって言うんだろ？　なら、父に頼めよ！　ついでにフランス語でいいぞ。私は世界の言語を一万四千年前よりからの旋律言語だろうと、どっかのアッカドだろうとなんでもかんでも全部網羅している」

辛辣な言葉に、二人のフランス人は呆然とする。それも当然、自分らは世界でも名だたる富豪なのだ。それが日本の小坊主にいきなり牙を剥かれた。これには二人も何も言えず閉口した。

さて、何故彼がイラついているのかを少し説明しよう。

ここは、七十階建てビルの最上階。ワンフロアが住宅十数件は収まりそうな私室に彼はいる。

最高経営責任者（CEO）にして各社の社長を兼任する父アーサーから稀阿が任された業務を熟す執務室だ。しかしあまりの来客数の為に、ほぼ接客部屋へと様相を転じている。

そして隅に放られたのは、日本の学園から渡された手つかずの夏休みの宿題だ。

これを終えたいだけなのに、ひっきり無しの来客はその作業を阻害する。それが彼の腹を煮えくり返らせているのだ。さらにもう一つ癪に障る事もあった。ガラス窓の向こう。対面に建造された石油王のビル。父の一声で、二年もないうちに、そこの娘と婚約が決まっているのだ。

つまりこの時代に政略結婚だった。

「――セシリア、お客様がお帰りだ、金を求める次のハイエナを入れてやれ！」

だから稀阿は一気呵成に彼らをぶった切る。

そして次の接客が始まるまでの時間、稀阿はＰＣでグラフをチェックした。

ここ昨今の株価の下落。この景気不安はおかしな点があると稀阿は推察していた。

耳道へ直接送られてくる海道所有の個人スーパーコンピューター。上層部の間で『ルーム』と呼ばれる超Ｙ級ＦＬＯＰＳの自走高速演算処理装置でも、同様の答えが弾きだされたようだ。

【何か、上層部以外の存在が資金流動に動いています】

流れてくるその言葉は稀阿を苛立たせる。そんな稀阿だったが、ちょうど扉から中華の企業家が入ってくるところだった。しかも彼は言葉にもならない叫びでいきなり飛び掛かってきたのだ。

「ほぉ、少しは気骨があるじゃないか」

これもいつもの事だった。再三の融資の拒否、ついでに企業を吸収。事実上倒産させたのだが。その恨みからナイフを取り出したのだ。「稀阿さま!?」秘書のセシリアが叫ぶ。が、稀阿が指を弾けばナイフは粉となって消え失せた。唖然とする男。その手を逆手に取り、稀阿が相手を投げ飛ばす。強化ガラスに叩きつけられ力無く崩れていく男に、雪崩れ込んできたガードマンが取り押さえた。

「ルームの恩恵だ。これも知らないとは成り上がりだな」
傲岸不遜の態度に呆然とした男は、やがて四肢を震わせ、憎悪の眼差しをむけ、片言の日本語で確かにこう言った。
『わすれないぞ、札束のサファリで眠る金色の獅子め！』
それは稀阿に付けられた政財界の蔑視語。そこで稀阿は双眸を彼に投げつける。その冷たい眼差しに男は嚥下を余儀なくされるが、震える眼差しで稀阿を睨みつけた。
そしてガードマンが男を立たせると下層へと連行していく。
それからも入室が続き、稀阿は目線もあわさず手振りに罵倒を交え追い出していく。
「――どいつもこいつもしつこい、お前ら全員潰れちまえ！」
そう、言葉を投げ捨てた時だった。
「えっ⁉　な、なんで⁉」
怯えた少女の声が返ってきた。
しかも日本語でだ。突然現れた日本の少女に稀阿は虚を衝かれて向き直った。
「あ、あの海道君。突然の、面会の約束を承諾して下さって、ありがとう。一学期の終業式以来だよね……神無月（かんなづき）です」
「か……神無月？」
扉で立っていたのは海道と同じ聖嶺地（せいれいじ）学園の制服を纏う少女と、母親だろう女性だった。
天窓の蒼光を受ける膝裏まである艶やかな漆黒の髪を優しく揺らし、少女は母親と共に稀阿へ深々と会釈をしてくる。目元でそろえられた前髪から覗く切れ長の柳眉。大きな明眸を震わせたのは不安の為か。優しい稜線を描く鼻梁は精緻なフランス人形みたいで美しい。
そして稀阿は思い出す。彼女が同じクラスの二年G組の女子だという事に。さらに隣席にいたという事実。で、ありながら会話するほどの面識はないという事だ。
美少女の多いクラスゆえに、稀阿も相手が活発な子ではないと記憶に残らないのだが。
「確か、同じクラスの神無月だ……ったか？」
「や、やっぱり覚えて……ないですよね。隣の席なんだけど」
「悪い、あまり印象深くなくて」
「……一応、アポイント取ってもらってたんだけど」
「それ秘書のセシリアだ。俺と同じ学園で同じクラスだから優先的にいれてくれたんだと思う」
「……そ、そうだったん……ですか」
彼女の声がか細くなっていく。
「で、下の名前が確か……」
「美代（みよ）……です」
「ああ、うん、そうだ。良い名前だな」

稀阿は大仰な仕草で頷くと勢いよくソファーから立ち上がった。そのまま室内を歩きながら。
「俺の記憶が正しければ出席番号17で、生年月日は12月1日。身長162センチ。スリーサイズは……グレイト、バンキュボン」
「……」
「母親は個人経営の飲食店、父親は鉄鋼業関係の中堅どころの社長で先々月事故が――あ！」
記憶にある彼女のデータを滔々と語り、稀阿はその一文を思い出して、はたと唇を自ら抑えた。語った内容の事もあるが。扉の前で佇むのが神無月母子だったのだ。それで、なるほど、と海道も全て把握する。先々月末に工場で崩落の事故があり、その渦中に父親が巻き込まれたのだ。その凄惨な現場は何故か天井と床に１ｍの穴を開けていたと報告されていた。
「そういう事です……。でも、覚えてくれてたんだね。学校だと、海道君は皆に囲まれて、私じゃ……会話もできない人だから」
「じ、情報もビジネスだ。変な意味ではなく最低限は収集するクセがあるんだ。そして君に関してだが、悪い。あまり良い情報ではなかった。気に障るなら内容のほうも忘れよう」
「あ、ううん!?　いいよ……よければ、その、覚えておいて」
そのまま少女は言葉を濁す。ばつが悪く、入り口で立ち尽くす親子を海道は手招きした。
「――突然の訪問、申し訳ございません。娘の美代から海道様の事を聞き及び、恥と知りながらも私どもは、融資の嘆願に参りました。どうか、お願いできないでしょうか？」
ソファーへエスコートすると、そうそうに母親が深々と頭をさげた。
「単刀直入ですね。しかも遠路遥々ようこそクアランプールへ。セシリア、お茶汲みは俺がやる。早急に神無月興産のデータを転送してくれ」
「申し訳ありません稀阿さま。あまりに急なアポの為に十分なデータは揃えるのに少々時間が」
そこまでセシリアから聞き、なるほどと稀阿はポケットからジッポを出して弾いた。
ピン――と、小気味良い音を立てて蓋が開く。
「なら、今からガフの部屋に入る。俺のホスティングコードで各方面にアクセスしてみよう」
それにセシリアが小さく唇を細めた。
笑われたな、と、稀阿は思うが。稀阿は親子を待たせ、退室するセシリアを確認してからＰＣを操作。握ったジッポを神経質に開閉を繰り返す。そして彼女らが座ったソファーを正面に見すえ、稀阿が一歩を踏み出すと。驚く二人をよそに、稀阿は空間から忽然と消失した。
「海道、くん……？」
美代が恐る恐ると声を出すが、その巨大な室内には親子しか存在しない。
それから妙に静かな時間が訪れ、「おまたせ」稀阿の言葉が二人の肩を跳ねさせた。
二人の動揺を置いて、稀阿はソファーに座ると、彼の周囲の空間に、光の線が造るパネルが

幾つも現れた。空中に浮かぶそれらを、稀阿は幾つもスライドさせていく。
「ん、これかい？　新技術でね。やがて民草へ広まる新文明の一端だ。ただコストが高くて実用段階にはまだ掛かるが便利だろ？　物が置ける。この理論で雨等を防ぐ新しい傘や、車同士の接触事故の反射などに使うんだとさ。――そうだ、こんなのもあるぞ」
　テーブルに隠したボタンを操作し、立ちあげる稀阿。南側の大窓が開き、突風が室内を蹂躙する。それらを厭わず輝くパネルを引き連れ、稀阿は窓辺へより。「ちょ、ちょっと何を――」呆気に取られる美代の前で。「こんなこともできる」稀阿は外へダイブした。
「――きゃあああああああ!?」
　親子らの叫びを聞きながら、海道はビルの外へ身を投げた。
　両目を手で覆う美代だったが、やがて掌をどけた視界が捉えたのは地上何百という高さの上に立つ稀阿の姿だった。稀阿は茫然とする二人に微笑を浮かべ歩行していくのだ。
「来ないか神無月。小さいながらも一つの企業を支えた君たち親子に敬意を表して、この素晴らしき未来の力――構築する力を先に味あわせてあげよう」
　美代は母親と眼差しを合わせ、やがて彼女は何かを決意。そのまま窓辺に身を乗り出す。と、地上何百メートルという高さからの突風が美代の髪をふきあげ足を竦ませた。
「大丈夫だよ」
　美代の前に稀阿の掌が差し出される。引けた腰で美代は稀阿の手を取り、「きゃ!?」小さく悲鳴をあげた時には外界へ引っ張り出される。とたん、足に何かが存在した。それを彼女が理解した時には、稀阿は彼女を優しく支えて満足げに頷くのだ。
「見てみろよ神無月！　これが俺達選ばれた民が持てる未来、構築する力――エムナーの力だ」
　地上との高さに青ざめ震える美代に、満足げに頷く稀阿が続ける。
「この力は、我ら選ばれた民が使い、下賤の輩には、やがて恩恵として与えられるのだ」

「……選ばれた民……？」
「そうだ。神より選ばれた一部の人類――神人類にのみ優先的に与えられる物だ。神が与えた頭脳を金の為に提供する科学者共が、神人類たる我らに献上する素晴らしき力。それが科学、俺達にのみ与えられたエムナーとよばれた力なんだよ！」
　稀阿は神無月の手を取ると余りに震える美代が滑稽で哄笑を巻き上げた。それに美代は少し頬を膨らませるが、稀阿は彼女エスコートしながら室内へ戻る。
　尊大に、そして傲慢に、高笑う稀阿に美代は苦笑う。そんな彼女の前で、稀阿はパネルを操作し窓を閉めると、周囲を漂い続けるパネルへ眼差しを向けた。
「話を始めようか。お母さん、貴社のデータを見る限り、工場経営は先々月の御主人の没後、経営が座礁。半導体部門も業績を伸ばしていましたが、今は提携していた企業から、前例の見

られない解体がなされている。つまり状況は最悪だ。しかもお母さんの経営している飲食店では補いきれない」
「すでに隠す事もございません。神無月興産の財政は海道様のデータにある通りだと思います。工場を潰すにしましても各方面への資金繰りは必要です。それでも額が額。手が付けられない状況です。ただ、給与を待ってくださる従業員への支払いは最優先で行いたく、飲食店の方から補填したいのですが、小さな一軒のお店。これだけでは、とても」
「なるほど。それでも従業員を優先される気構えは立派です。……ただ、データを見る限り財政の圧迫は、何かしらの作為的な漏えいも感じられる。これでは資金投下は焼け石に水では？」
「作為……漏えい、ですか？」
「何かしらの企業に付け込まれたか……現段階のデータでは貴社の推移を諦観するしか叶いませんが。いずれにしろ現状で必要な額は2億。吸い取られる額から逆算して先に3億は投資、その間に全てを終える必要がある。さらに言いづらい事ですが、貴社と海道上層部は今まで親交が一切ありません。我が父に相談しても、底の抜けたバケツに水を入れるような物だと一蹴されるのは予想しやすい。挙句、投資しても返ってくる見込みがない」
美代の母親は、その答えに返答が出来ない。
「いいですか、残念ですが海道財閥の方からの出資は出来かねます。これは父に問い合わせなくても私個人で跳ねられる案件です」
「……」
「まず理由その一、企業体として、未来がありえない企業に投資は出来ない。理由その二、見返りの保証もなく、新分野への投資にもならないのなら魅力はない。そして三番目の、これが一番大きいのですが。私のところのデータで把握しきれない資金の漏えい。正直得体が知れない。そんな危ない何かが手薬煉引いてる企業体には干渉したくない」
画面に落とした視線のまま、二人の落胆は気配だけでも解るようだった。
「――ですが、それは企業家としての話。私個人で、なら話は別だ」
二人の親子がポカンと眼を見開いた。
「神無月美代。よく聞けよ」
そこで稀阿は一度咳ばらいをした。
「いいか、これはもうビジネスじゃねえ。だから敬語も無しだ。てか、これはあくまでクラスメートを助けてやる善意での話し。企業家としては笑えないクズ話だ。だからお前のとこでも死力を尽くして貰う事になる」
「意味が分かんないけど、何か変わるなら……」
意味は解らない。それでも何かが起こるならと彼女らの瞳に輝きが確かに戻る。その中で稀阿は満足げにほほ笑み、こう告げた。

「要は消えてく金よりも多く資金を投入して、消えてく金より余った段階の金で従業員への支払いをすませろ。そして金が消える前にこの世界から手を引け」
「え？」
「最悪できるなら破産申告のほうがいいんだが。そっちの判断はお前らに任せる。そしてより多くの金を出す為にも工場や飯屋、一切合財売り払え。足りない分は俺がどんどん補填してやる。それでかつての従業員への未払い金も潤うだろ」
「それで、それでいい！　あ、お願い……します」
「分かってるのか、親父が残した工場も全て売却なんだぞ」
一度母親と向き直る神無月美代だが二人は頷いて、もう覚悟はしていたのだろう。稀阿の提案を受諾するのだった。そんな美代に、稀阿は言いずらそうに一言告げた。
「それと……俺達が在校する私立の学園にも、いられなくなる……」
美代が、ようやく事の意味に気づいて固まった。だが当然だ。稀阿も在籍するような学園だ。それ相応の金のある者でなければ在籍等出来はしない。「割り切れ」ゆえに冷たく言い放った。
彼女はそれに震えるようにうなずく、そんな挙措を見ながら稀阿は――
「――聞こえてるなセシリア！　手続きを早急に頼む。スイスのポールマン氏にアポを取れ。この親子を救ってやろう。俺は動くぞ」
『わかりました。ですが、次のご予約の方が――』
「待たせろ！　この子たちが最優先だ！」
「あ、あの……海道君、……私、一生かかっても……返すから」
美代が、母親と深々と頭をさげていた。
「いらねえよ神無月美代！　3億もの金をこれから貧乏暮らしが始まるお前らに返せる物か。俺は俺の前に広がる覇道を見据え、面白半分で竹藪に金をすてるんだ。だから気にするな！」
「ほ、本当に……？」
「ああ、その代わりこれからの人生、お前らはどこかで必死にがんばれ。そしてお前らは今後見知らぬ地で、俺の輝かしい成功をせいぜいマスメディアを通して恍惚の表情で見続けるが良い！　それこそが俺の楽しみ、それでこそこの俺様だ！　ふふ、ふはは、うふはははははは――――――!!」
「ありがとう……海道くん」
「ああ、これでもう二度と会う事もない、全て忘れるがいいさ！」
そう言うと。ちょっとした羞恥とテレを自尊心に隠した海道稀阿という男の高笑いがマレーシアに響き渡っていくのだった。
――一週間後――
神無月興産の全ての債権を滞りなく処理した稀阿は、神無月母子が全てを処分し会社を無事たたみ、いづこかへ転居した話をセシリアから聞かされた。稀阿は不要になった書類を手振り

一つで燃やし、眼下に広がる景観をみながら何か郷愁にも似た気持ちが体を包んでいるのを感じていた。そして一度強くネクタイをしめなおし、そこで全てを忘れるはずだった……

――さらに一週間後――

稀阿は、初めて困る……という感情を知る事になる。父アーサーの来訪と同時に、海道財閥の莫大な株が買い占められた事を通達される。しかも財閥への小さな買収。財閥への小さなハッキングが始まり。それが個人情報、膨大な資産データに飛び火し、次いで各企業が所有する開発ロジックに至る全ての漏えいが始まり、またその責任の所在の擦り付け合いに発展した。つまり海道財閥はパニックと化した。対して稀阿は、この事件の前後関係を必死に洗っていく。けど、方法が解明できない。突然の信用不安は、海道財閥自体にも大きく飛び火する。

「なんだこれ……なんで一人大不況になっているんだ？」

あらゆる口座が凍結された通知に指先が震えた。各部署の解体が行われ、海道家の財産も決壊したダムのように漏れ出し、海道稀阿の個人所有も例外ではなくなった。

「馬鹿な、ナンセンス、これはナンセンスだよ!?」

実父からも資産が止められ、さらには稀阿は海道の椅子まで蹴り飛ばされる。

気づけば稀阿の株は全て父の計らいで売却。しかし補填は間に合わず企業が傾いていく。そうなれば、事実上の海道財閥の崩壊と共に、各国からさらなる買収が進んで膨大な貯金もなくなり、部屋の隙間風だけが稀阿の体を優しく慰めた。つまり、高二の夏休み40日で、世界の頂点に君臨した海道財閥の全ての資産が塵と消えたのだ。海道稀阿の所有するガフの部屋と呼ばれた『ルーム』の回答は最後にこう結論を出力した。

『――原因、全て不明――』

第一章　星の王子様、千葉県の造成地に立った一番最初の店舗なお弁当屋で途方に暮れる

「はーい、みんなー、おばちゃん今日は転校生を紹介しちゃうぞー」

桃色ブラウスからはみ出しそうな巨乳を揺らすのはクラスの女副担任だった。

ここは市立白木高校、偏差値レベルも低く進学校とはかけ離れた中堅どころの高校だ。そんな高校の一クラス、垂れ目でありながら愛くるしい眼差しに、柔らかな鼻梁に幼さを残す美人教師がいる。茶髪ロングの女教師は二十代前半。『美』としか表現しようのない面貌で微笑をクラスに向けていた。そして、その隣には妙にくすんだ男子が立っている。

「えと、こんな時期ですが、転校してきました皆斗中（かいとなか）ロアといいます。外人ポイ顔と言われますが、父がそれっぽいからです。でもボクは生まれも育ちも日本人です。どうぞ……宜しく、そして優しくして上げてください……えへ」

晩秋の足音が近づく十月の始め。高校に、頭を妙に下げる低姿勢な、そわつく男子がやってきた。目元まで隠す伸びた黒髪は見事に縮れ、瓶底メガネで表情までは読み取れないが、大柄な体躯の割におどおどする姿はクラスの視線を否応なく集めさせる。

衣替えを終えたばかりのクラスは紺のブレザーが席を埋め、女子はシックな赤リボンを胸元に巻いて映えている。クリーニングの済んだ真新しい制服纏う集団だ。なのに皆斗中の制服は余りにくたびれてくすんでいた。皺だらけで綻びまで存在し、肘に至っては黒ずんで滑りもある。まるでお古なのだ。これで注視を集めるなという方が無理だろう。

「――よ～し皆斗中、これが転校生のマニュアルだ。わら半紙数枚のちゃちい物だが、しっかり熟読しておけよ。気が向いたら先生がテストでもだしちゃうぞ～」

窓際で副担任の胸を見つめていただけの壮健全開なクラス担任がクラスの一番後ろ、扉側の席を指定する。そこは廊下の風が舞い込む吹きっ晒しの不人気席だ。

皆斗中はクラス中から見つめられ、幾度も周囲に会釈をしながらおずおずと席へ辿り着いた。

「……初めまして皆斗中君。樋代（ひよ）です。よろしくね」

突然皆斗中は隣になる女子に挨拶をされた。

「え、あ、皆斗中ロア……です。よ、よろしくおねがいします」

皆斗中も咄嗟に返すが、今時珍しいと思った。まず、彼女は黒髪だった。さらに二つのお下げを胸元へ垂らし、皆斗中と同じく厚く重苦しい瓶底メガネをかけている。少し理知的な雰囲気。だけどやぼったい。それが皆斗中の彼女への印象だ。

皆斗中はおずおずと、小さく口元で「えへ」っと豊齢線を浮かばせ、もう一度会釈すると、椅子が床を擦らないよう静々と着席していく。ただ、視線を感じてもう一度隣席へ眼差しを向けると、彼女は皆斗中を見つめていた。それが互いに分かったものだから。

同時に、「えへ」会釈込みの愛想笑いを返した。